応援団について

——キャンパス・ライフに不可欠の団体か奇妙な遺物か——

Gudrun GRAEWE

1　はじめに

外の立場から日本の若者を観察すると，ヨーロッパやアメリカでほとんど見られない先輩・後輩の関係や上下関係，規律を大切にする中高生や大学生のサークル・クラブ活動（部活）が目立つ。その中でも高校・大学の応援団はひときわ目立つ存在であろう。応援団の中でも，女子学生のチアリーダーや吹奏楽団はアメリカなどにも見られるが，黒いガクランを着用している応援団リーダー部の男子学生団体は日本でのみ見られる独特な存在であると言えよう。裾の長い，立ち襟のついた上着とだっぷりしたズボンを組み合わせた独特のスタイルの制服はアナクロニズムのようなものとして，軍国主義ないしは帝国主義時代を思い起こさせる。それは軍服のカリカチュアもしくは歪曲された学校の制服のように見える。制服だけではなく，キャンパスにおける応援団の団員の行動・振る舞い・態度や憤怒の形相は軍隊式で堅苦しく，現代社会ではもう殆ど見当たらない規律・服従や権力主義を体現している。その上，応援団の練習中，そして活動中の動物的な大声の叫び，振り絞った声を聞けば，驚きのあまり，唖然とする者もいるにちがいない。しかしこのように応援団を不思議な現象とみなすのは外国から来た観察者だけではない。日本人の学生などにとっても，応援団の存在や活動は必ずしも見慣れた，当たり前のことではないのである。

応援団を観察するうちに，幾つかの疑問が湧いてきた。それを3つに分ければ，一つ目は応援団の表現方法，二つ目はその役割，三つ目はその自己認識となる。1，応援団の団員は何故このような，今日の目で見ると時代遅れの格好をして，このように軍国主義的な象徴を使い，規律や階級制を厳格に守りながら行動しているのか。また，応援団の団員は政治的なメッセージを発しているのか。2，学園生活の中でスポーツはどれぐらい重要なのか，そして大学スポーツや学園生活全体における応援団の役割はどのようなものか。試合の時に，なぜ観衆を応援団によって管理・操縦・鼓舞する必要があるのか。3，応援団の自己認識とその実際の存在理由を並べて考察すればどのようなことが推測されるか。そして自己認識と表現方法はどのように関係しているのか。

応援団（応援部，応援指導部ともいう）は通常，リーダー部（指導部ともいう）と，音楽演奏を行なう吹奏楽部，そしてチアリーダー部から成り立っているが，ここでは取り分け日本にしか存在しない集団としてのリーダー部を考察の対象にしたい。応援団リーダー部[1]は，競技における選手の士気や意欲を高めるために，観衆の応援を指導する組織的な集団の一部として，士気高揚のための応援行為を演武（拍手・エール・応援歌など）によって指導，統轄している。メンバーが比較的少なかったり，日本の多くの大学生からも目を見張るような珍しい集団と見なされていたりしてはいても，日本の多くの大学に存在している独特なものとして考察する価値があると思われる。その際，スポーツ界の中での役割だけに止まらず，明治期に学生自治の一環として自校の運動部の競技を応援するために組織化された応援団の歴史をたどって，現在までの学生文化における役割がどのように変化してきたのかといったことなどを調べてみたい。参考文献，先行研究，経験者の報告など，資料は今のところ殆ど見当らないので，インタビュー・アンケートなどという調査方法によっても情報を得ようとした。そしてインターネットで「応援団」というキーワードで，新聞や雑誌の記事を探った。

ところでこのテーマについて何故資料があまりないのかという点については幾つかの理由が考えられ

る。まず一つ目の理由として，実際に存在している応援団にとって，文章化された記録（例えばそれぞれの大学の応援団の歴史，応援方法やルールなど）は存在や存続のためにあまり重要ではなかったために，資料となる文書はそれ程作成されなかったということが考えられる。応援の方法やルールは先輩から後輩へ口伝えや実際の練習によって伝えられるため，スポーツの一部分として，様々なことを書き留めるのは最低限必要な場合のみであろう（記念刊行物，試合のプログラムなど）。他の理由としては，応援団の歴史は必ずしも賞賛に値するものだけではなかったということも挙げられる。応援団のイメージは一般的に暴力と結びつきやすい傾向にある。それを裏付けるような暴力事件も歴史の中で何度か起こった。このような暗いイメージのため研究もそれ程行なわれなかったのではないかということも考えられる。また，応援団はあくまで「応援」する立場であり，主役は野球などの実際のプレーヤーであるために，応援団自体が例えば暴力事件などを起こさないかぎり，それに焦点が当てられることがそれ程なかったということも言えるのではないか。

以上，いくつか推測してはみたが，私が応援団についての研究を始めて間もないことから，応援団について全ての事実を把握することはできていない。したがって，むしろこれからの研究への布石として，本稿では応援団とはどのようなものか，どのように定義できるか，解釈できるか，またこのテーマに関して今日までにどのような資料が見つかっているのか，などといった事柄に焦点を当てて述べることとし，以後の研究につなげていきたいと考えている。応援団を理解するための手がかりとして，まずその歴史を探ってみたい。

2　応援団のはじまり

ここでは応援団の歴史をさかのぼって，代表的と言われる東京の大学の応援団の創設時代について簡単に述べたい。他に資料が見当らなかったので，主に東京六大学応援団連盟OB会編の記念集『応援団・六旗の下に』を参考に使った。しかし，この文献の出発点は学問的なものではないことを断っておく[2]。

明治以降，日本には様々な欧米のスポーツ（野球，ボート，テニス他）が伝来したが，多くは対校競技として発達した。応援団はそれらと共に形成され，学校文化の一部となった。

日本で応援団は1890（明治23）年に初めて自校（旧制高校）の運動部の対校試合を応援するために正式に組織された。その競技会は，隅田川において，旧制第一高等学校（現在東京大学教養学部）と東京高等商業学校（現在一橋大学）との間で行なわれた第4回ボートレースであったと言われている。第一高等学校が浅草側で白旗を，東京高等商業学校が向島側で赤旗を立てて対抗した。その時に一高生の応援団によって初めて応援歌というものが斉唱された[3]。また他の説では，応援の初まりは1903年に，旧制第一高等学校が横浜の外人クラブと横浜公園で行なった野球試合に，当時の一高生が行なった応援であると言われている[4]。

同じ年の1903年には野球の早慶戦が始まり，両校の応援団が応援を行なった。そのころの両校の応援団は，現在のような正規の組織ではなく，野球の試合の当日に陣取った観衆に扇子を振りかざして，拍手をさせる程度のものだったと言われている。

東京六大学応援団連盟OB会編の記念集には次のような記述がある。「街の若衆やトビ職をはじめ，熱烈な一般ファンで埋まった応援団の熱気はすさまじく，第二戦，第三戦と試合を行うごとに極度にエスカレートし，過熱化の一途をたどった。そして三十九年秋，一勝一敗のあとを受けて決勝戦が行われるその日，徹夜騒ぎや球場占拠騒ぎなど，応援団の目に余る過熱ぶりに不測の事態を憂慮した学校当局が，ついに「決勝戦中止」を宣言し，これによって早慶戦は，以後二十年の長きにわたって中断される憂き目となった」[5]。

このように，応援団はその発足当初から，幾つかの暴力事件を起こして，その過熱ぶりや暴力行為が社会問題化し，教育界からだけではなく、様々な方面からも批判された.早慶戦は1906年から応援団の過熱ぶりが原因となって20年間禁止となった後，1925年に復活した。

慶応大学の応援団は当時，まだ常設のものではな

く，野球シーズンごとに自治統制委員会の形で組織され，そのうち何人かが応援歌の合唱を指導するぐらいのものだったと言われている。1929年ごろから，応援の方法として，人波（ウェーブ），三段パンチの拍手など，様々な工夫が加えられ，応援は次第に派手になっていった。その時，それに対して「ショーまがいの応援は行きすぎではないか」と批判する声もあった[6]。そしてある暴力事件で慶応大学の応援団は学校から厳重な警告を受け，一年後に文部省訓令によって廃止されたが，1933年には結局「慶応義塾大学応援部」が常設の応援組織として結成された。以後は野球の試合応援に止まらず，アイスホッケー，ボートレース，相撲，柔道，剣道などの応援活動も行なうようになったが，1936年に部内の摩擦が生じ，また解散となった。しかし応援の必要性は認められていたので，1943年のいわゆる「最後の早慶戦」まで応援団はまた「自治統制会」だけの形で続いた。

1903年に誕生した早稲田大学の応援団は“右翼院外団的”な体質だったと言われる。そのために，学校当局からは認められていなかった。1931年にやっと大学公認の応援部が誕生したが，2年後に慶応の応援団に暴行を加えたことで責任を問われ，解散させられた。1940年には教員の指導の下で「体育会応援技術部」が結成され，そこでは応援の技術だけではなく，「部員は早稲田大学学生の代表であるから，代表にふさわしい人格，識見をもて！」と，精神面の充実も重視された[7]。新しい応援団の中心となった野中虎之助の“応援の哲学”に，応援のルールが定められている。彼は「応援の第一は試合の妨害にならぬこと。投球モーションと同時に“ワッショイ，ワッショイ”とやったり，“ボール，ボール”と各人が怒号したりすることは，試合の妨害のみならず，スポーツマンシップにもとる。第二は試合に関しては一切干渉せぬこと。審判の決定に口を出したい気持ちはわかるが，断じて行ってはならぬ。この二つを心がけていれば，大過ない応援ができるが，要は“選手が試合の時に，最高度のスポーツマンシップを発揮し得るように，それにふさわしい空気をつくり出すようつとめる”ことを，応援部員は常に心がけていなければならない」と述べている[8]。早稲田の応援技術部は太平洋戦争の勃発により，1942年に解散させられたが，「学徒錬成部特別指揮隊」という別名で存続していた。しかし，スポーツの応援としては1943年の「最後の早慶戦」が戦後に再開するまで，最後になった。

明治大学の応援団は1921年に誕生した。その目的は「愛と正義を標榜して，学内の推進力になろう」ということだった。そのころ，今でも通用している応援のバリエーションが出現したので，「応援の形式は明治がその土台を創った」と，誇らかに書かれている。昭和に入ると（1926年以後），他大学の応援団と同様に，明大の応援団内にも内紛が生じた。その理由は専門部と学部の間の激しい対立だった。「そして大正時代の熱烈な，しかも誤った母校愛の持ち主である壮士風の“紳士”たちが，仕込杖をもって校内を横行闊歩する姿もあった」[9]と言われているが，1938年に統率力のある団長が現れて，応援団を組織的なものへまとめることに成功した。1941年に戦争の勃発とともに，明治大学の応援団は自然に解散した。

法政大学の応援団は1922年に組織された。いわゆる「烏合の衆」ではなかったことが強調されている[10]。その証拠として，応援団が1929年に校歌をつくり直すのに協力し，一般学生から募金して作曲料を払った、という真面目な活動が挙げられる。そのころ，相撲部など体育会の有志が応援団の団員になって参加した。1930年の秋の野球リーグ戦で優勝したために，より強力な応援団を結成したと言われている。当時の応援団は総長直属という組織で，“旗本”的な存在と言われ，団費の一部までも総長から寄付されていた。法大の応援団は戦時中もそのまま存続した。

立教大学の応援団は比較的遅く，1932年に組織として発足した。応援団創設のきっかけは野球のリーグ初優勝だった。祝賀のパレード，提灯行列を統率するために，何人かが選ばれ，応援団となったと伝えられている。戦争中，応援団は生活指導部という名前で，細々と存続していた[11]。

戦争が終わって，学徒出陣などで軍務を果たしていた学生たちは次々と大学に戻ってきたが，戦場の残酷さをそのまま持ち込んできて，学園内暴力は日

常的なものとなったと言われている。大学生には食料もカリキュラムも希望もなかったので，確かに暗い時代であったが，『応援団・六旗の下に』には熱っぽい口調で次のように書いてある。

> こうした中に大学の復興を真剣に考えていた復員学徒がいた。元応援団・部員だった男たちである。大学の現状を憂いた彼らは，暴力に対抗するために，あるいは一般学生たちを虚脱状態から救うためには，応援団・部を再興し，全学生の士気を鼓舞するのが一番の早道であり，急務だと考えた。もともと母校愛に満ちあふれ，熱血漢ぞろいの元応援団・部員たちは，“学園に新しい息吹と秩序を”というわけで，新しい学園づくりの意気と気概と使命感に燃えていた[12]。

八巻恭介という陸軍少尉は明治大学の学生に復員したが（1947年卒），肩を落して，夢も希望もなくした，校内をしょんぼりと歩き回る学生の姿を見て，「これではいかん。彼らを救い，学園を再建するにはどうすればいいのか」と自問した。野球の試合を見た時，「ウン，これだ！応援団だ！！応援団をつくって学校の再建，再興だ」と，彼は学園を明るくするための目標を決めた[13]。このように，応援団の新たな結成によって学園生活の復活，学内の学生を糾合することに努めた者は他の大学にも現れた。彼ら戦後に応援団を再建した者たちは応援団の世界では英雄のように思い出されている。

このように，応援団は戦後に再興して，大学の復興に指導的な役割をはたしたとされている。また『応援団・六旗の下に』のまえがきによると，当時は学生の一部に“院外団”と呼ばれた暴力集団もあり，応援団は彼らを抑えた。つまり，応援団は学園の警備のような仕事によって秩序や規律を維持しようとしたのである。「殆んど娯楽のない当時六大学野球は非常な人気で学生は大挙して応援にくり出したが“院外団”は試合の勝ち負けによって，すぐにも“暴力団”に変貌し，相手方に圧力を加える実力行使に出るため，一般学生は落ちついて観戦も応援もできない状態だった」[14]。

そういう暴力により効果的に対抗し，また“過去の応援団”を改革して新しい時代の要求に相応しい応援団が創れるはずだという理念に基いて，1947年5月19日に六大学応援団連盟が設立された。

戦後の応援団員は一般的に軍務を果たしてきた学生から成り立ったので，応援の訓練は非常に厳しいものだった。ある早稲田の応援団員の思い出によると，「訓練はすごかったですね。ビンタなんか軍隊そのもので，練習が終わって帰るときには，電車で吊皮が持てないほどでした。（中略）海軍とか陸軍から復員してきた者ばかりで，すごく気合いが入っていました」[15]。

もちろん，戦後の応援団の復興において，賞賛できないエピソードも記録されている。前述した明大の八巻を囲む学部系の応援団再結成の動きとは別に，同じ大学の専門部にも応援団が誕生したが，その指導者は軍隊帰りの暴力団的な人で，戦前型の応援団を目指していたので，学校側はけっきょくその専門部系の応援団を認めなかったのである[16]。

戦後の応援団に，暴力が特別の役割を果たしたことは次のことでも証明されている。応援団が総長直属の「旗本」だったといわれる法大では，戦前から空手部に籍を置いていた黒沢孝道という学生が，暴走する学生たちをコントロールするには応援団しかないと思い至って，全力を傾けて応援団を動かした。黒沢は統率力を持っていたため，黒沢を次の応援団長に推薦することが決められたが，団の不文律として，空手部・ボクシング部に所属している者が応援団を兼ねることは禁じられていた。何故なら，「空手やボクシングをやっている者が制裁だと称してぶんなぐれば，人命にかかわることだってあり得るのだから，禁止されていて当然である」[17]とされたからである。つまり，それらの部員が挑発されればすぐにでもその技術を利用するであろうと懸念されたのである。しかし，当時はいわゆる硬派・バンカラの，暴力行為をする学生が多かったので，それを抑える力を持っている者でなければ応援団をやっていけないという理由から，応援団は黒沢を次の団長にすることを総長から特別に許可してもらった。

その時の応援団の任務は簡単ではなかった。警察のように，試合のときに暴力を使ってでも不良を抑えなければならなかった。戦後，娯楽といえば，映

画やスポーツぐらいしかない時代に，興行には必ず入場券などを買いしめて高く売りつけるダフ屋やヤクザが出現した。学生野球には学生ヤクザと呼ばれる者も現れた。それらの害をもたらす者を抑えるために，ある程度の実力，つまり暴力を使う覚悟が必要とされた。そのために，黒沢のような人は適役であっただろうが，そのような硬派の面があったので，校内のものに対する恐ろしい行為もあった。黒沢は例えば，「野球の対東大戦に負けた時などは，野球部のキャプテン以下選手全員を整列させ“気合”を入れたこともあった」[18]。黒沢は1946年から2年間応援団長を務めて，このように功罪両方あったが，学生を脅すチンピラなど，一般学生に害をなす者を排除し，球場の中でも安心してゲームを楽しみながら応援できる環境をつくることが彼の目標だったので，暴力を振ったにもかかわらず，英雄として記憶されている。

法政大学で禁止されたことは立教大学のポリシーでもあった。そこでは戦前の応援団は全員が相撲部と柔道部を中心とした学生たちが兼ねていて，戦後も同じく体力のある腕力の強い柔道部・空手部・剣道部などのメンバーの兼けもちで成り立っていたとされている[19]。何故かというと，当時の応援団の役割は「学生と学校を如何にして暴力団から守るか，野球の試合が終った後，必ず起こる相手校とのケンカというよりも“襲われる立教生”を如何にして守るか」[20]ということであったので，それを果たすために，空手など武術が使える“ケンカの強いスタッフ”を集めるのが目標であった。応援団のみを専業とする者はその時まだいなかったといわれている。このように応援団の役目の一つは一般の学生をヤクザなどから守ることであった。地理的にも東京の池袋は従来から暴力団組織の所在地であるので，この任務は池袋にある立大の応援団にとっては特に重かったと考えられる。

それぞれの大学の応援団は球場や学内の安全確保などに努めるというりっぱな心情があったにもかかわらず，学生に無理やり愛校心を植えつけるなど粗野な行動もあって，現在から見るとけっして過誤のない団体ではなかった。このことは次の二つのエピソードによっても明らかである。ある法政大学のOBの記憶によると，東京六大学野球リーグ戦で法大に負けが込んできて，球場へ来る学生の人数が減った時，「われわれ応援団は教授に頼み込み，授業を休講にしてもらい，学生たちを校内から半強制的に球場へ拉致したこともあった」[21]。良い意図があったとしても，方法は疑わしかった。（授業の中断を喜ばしく思った教授も学生もいたかもしれないが，半強制的とはいえ，拉致はけっして褒めるべき行動ではないだろう）。そして，戦争直後，立教応援団のスタッフの集め方もかなり激しかった。団長が空手部の部室に入って，若くて強そうな者に向かっていきなり“お前今日から応援団だ！”と強制的にスカウトしたと言われている[22]。

3　東京六大学応援団連盟の結成—1947年

1946年に，明大と法大の応援団員の間で応援団連盟を創ろうという考えが生まれた。当時の両大学の応援団は六大学の内，トップであるといわれていた。「明治と法政だけは立教以上にカンロクがあった」[23]と，当時の立教の団長は語っている。両大学は連盟の話を立大に，そして1946年に応援団を設立したばかりの東大に相談し，説得した。最初はこの4大学で連盟を結成した。この連盟結成にふみ切った一つのきっかけは早慶の“傲慢さ”を排すということであった。「早—慶戦だけ別格扱いにしてリーグ戦の最後にやるのはどういうことか？六大学リーグだから六校が平等であるべきだ」[24]とされた。

連盟が結成されてから，ケンカさわぎや暴力が段々おさまっていったと言われる。それをきっかけに，立教の応援団員は他の大学と同じく，他部とのかけもちではなく，応援団専業の者を揃えたいという意図が強くなった[25]。

法政大学1947年度応援団長の黒沢孝道は当時の暴力的風潮と連盟の結成との関係について次のように語る。

> 応援団といえば，戦前の印象からでもあろうが，とかく暴力団の集まりのような見方をされることが多かったが，それはむしろ逆で，そうした暴力から如何に学生たちを守るかが応援団の使

命のひとつであった。そのためにはある程度腕力のあるものでなければ抑えがきかないことも事実だった。また，実際にチンピラと対立したり，学生ヤクザとトラブルを起こしたこともあった。それが“暴力団的”ととられる原因かもしれないが，誤解もはなはだしい。このようなことのないように，（中略）六大学の親睦団体をつくろうということになったのである。（中略）東京六大学応援団連盟結成で，各校間のトラブルはなくなり，真に民主的な応援団になっていったのである[26]。

このような考え方の下に連盟ができてからは，各大学ともそれぞれの付き合いがスムーズにいくようになった。それぞれの団長はしばしば会合をもって，応援団のあり方などについて論議したと言われる。「こうして応援団の中に，縁の下の力持ち的な要素が加味され，戦前の硬派的な印象は次第に薄くなって，民主的な応援団に生まれ変わっていくのである」[27]。

では，その「民主的」というのはどのような意味をもっているのだろう。上記に述べてあることから解釈すると，連盟結成以後，応援団が「民主的」になったというのはただ，ケンカや暴力が少なくなった，ということになるだろう。しかし，それは別の変化も意味しているにちがいない。例えば，立大では戦後，体育会を中心とする会議で，次のことが決定された。「応援団は従来あったようなボス的要素を払拭し，学生の選挙によって団長を選出する」[28]。

明治大学の八巻団長が連盟の開会の時に読んだ「結成式開会の辞」には，次のように書いてある。

応援団という言葉を聞いてまず我々のインスピレーションに浮かぶ観念は，紋付羽織袴さながらのいかつい暴力団的存在であり，それが過去のいわゆる応援団としての性格であると見られた傾向が多分にあったことは事実であります。しかし，今日ただ今より発足するこの連盟は武力放棄を宣言した新憲法とその規〻を同じくいたしまして，武力，暴力の放棄とお手許にお配りした規約の中にもあります通り，真に明朗闊達なる学生精神の高揚にあたることを目的としたあくまでも素朴と純情の中に学生として，若さと熱を発散し，最も思い出多き学生生活の良き指導伴侶となることをモットーとしているのであります。

また，「母校のために燃える若き息吹き」を誘発し，「スポーツ精神，すなわちフェアプレイの美しき芸術として，学生に夢と感激を与え」，「この混乱頽廃せる社会の中にあって，その指導的役割を果たす」ことが応援団の目的とされた[29]。

これまでは，東京六大学についてのみ語ったが，関西にも連盟があることにも触れておく。「関西四私立大学応援団連盟」の歴史はまだ浅く，1975年，関西大学応援団（創立1922年）・関西学院大学応援団総部（創立1947年）・立命館大学応援団（創立1946年）そして同志社大学応援団（創立1906年）によって結成された。活動理念は「四私大応援団の親睦・団結・又学生スポーツの正常な発展を図ること」とされ，「応援団の本来的な姿をより多くの人に理解してもらうために」，連盟祭は連盟の年間行事のうち最も大きな行事となり，現在も行われている[30]。

4　時代の変遷に伴う応援団の変化
—自己理解と実際の行動—

これまでで明らかになったように，戦前の応援団の印象と言えば，暴力団の集まりとして見なされたが，実際に小競り合いや暴行事件も多く起きたのは確かである。しかし，戦後はそのイメージとともに，応援団の実態も段々と変化した。東京六大学連盟の結成はその原因の一つでもあり，証拠でもあると言えよう。応援団は自分の大学の学生たちをスポーツ観戦の際に，暴行から守ったり，応援によって試合などを楽しくしたり，荒廃した戦後の学園に一つの明るさと精気を与えたりする，という自己理解に変化した。「大学の復興のためには先ず敗戦による虚脱状態から無気力になっている学生の精神をスポーツによって奮い起こす必要がある」とされたので，その推進力として応援団は育成されたが，「あくまで縁の下の力持ちに徹して学内スポーツの興隆に貢

献する」というのが応援団連盟の結成の精神とされた[31]。

1984年当時の東京大学総長平野龍一によると，応援団連盟の原点は東京六大学野球リーグ戦にある。応援団は「スポーツの各分野にわたって，学生の精神を奮い起させ，愛校心を昂揚させる大きな原動力となってきました」と言う[32]。このように，スポーツが中心であり，関心の的でありながら，応援団は「縁の下の力持ち」，つまり陰で努力・苦労しながら，活動するとされた。それは現在でも応援団の存在理由に関わる一つの問題であると思われる。

では，まず応援団の自己理解をより深く検討してみよう。1949年に卒業した早稲田の団員によると，応援とは「正しい学生たちの情熱を一つに集めて，眼前で行われている競技にぶつけるという気持ち」に過ぎない。当時の六大学のリーダーたちの考えによると，「応援のない競技では選手が能力を十分に発揮できない」のである。つまり，勝負・試合の結果に応援は大きく影響するとされ，応援団の必要性が強調されている。また，「拍手ひとつにしても，自分の拍手はみんなに見せるためのものではなく，それによって選手のファインプレーを引き出し，あるいは腹の底から勝利を讃えるものであるべきだ」，という考え方もあった。「その“こころ”がテクニックのなかに生かされてこそ，はじめて本当の心のこもった拍手だと言うことができる」，とされたのである[33]。

また，自分たちの手振り一つで3000人以上の学生たちをリードし，グラウンドとスタンドの連帯感を生み出すために信頼関係を確立しなければならないので，団員は学校内の模範生として身を律する必要があると考えられていた。このように，応援団の立場はかなり難しかった。つまり，応援団は陰で皆のために努力しながら，模範の機能をも果たさなければならなかったが，直接名声を博することはできなかったのである。他の運動部のように目に見える成果はひとつもなく，「応援団のおかげで勝たせてもらった」ということにはならない。応援団の活動があまり評価されないのは事実であろう。努力は自分のためではなく，大学のスポーツチームの勝利のためだけである。その上，自分の活動の背後に隠れなければならない。それは現在でも応援団のジレンマであると言えよう。

このような問題があるので，応援団に目的を持たせなければならないとされ，法政大学では例えば「礼儀・節度・闘志」という「三原則」がつくられた[34]。しかし，このように控えめな態度で競技のために闘うことは精神的にも負担がかかるのはいうまでもない。1950年立教卒の川原幸雄は80年代の状況を次のように嘆く。「最近の応援団は応援のための応援団だという感じが非常に強い」。以前の応援団は大学のシンボルとして，学生たちが学生生活を楽しむためのリーダー的存在だったのに，今日はテクニックだけでやっていると嘆いている。しかも，「縁の下の力持ち」という感覚が薄くなり，最近の団員には自分が表に出たい，目立ちたいと自己陶酔するリーダーも増えたと指摘されている[35]。

応援の手段として，リーダーテクニック（「テク」）があり，これによって，応援の進行に差異が生じる。しかし，それは観客に見せるためのものではなく，「母校に勝利をもたらし，それを讃えるためのもの」と，連盟初期のメンバーたちは考えていた[36]。そのために「切磋琢磨して技を競」って大学によって，様々なテク，つまり応援の型が作られた。指揮者（リーダー）の動作は，空手の型，相撲のシコ，歌舞伎のミエなどから取り入れられた[37]。例えば明治の相馬基初代団長（1925年卒）は相撲部にも所属していたので，明治のテクは相撲の「不知火型」から生まれ，法政の型は空手部出身の黒沢孝道団長（1947年卒）の影響で空手の動きが基礎になり，また東大では中澤幸夫応援部初代主将（1948年卒）が歌舞伎が好きだったので，歌舞伎のテクニックを取り入れたと言われている[38]。

しかし，このようなテクを教わってまた後輩たちに伝えたOBたちは80年代の風潮に次のような不満を抱いていた。応援のテクが変質した上，複雑になって学生がついてこなくなった。しかも，どの瞬間に「何をやるべきかという判断力」がなくなったとされた。そのうえ，それぞれの大学の個性がなくなり，応援テクが同じようなものになってしまい，腕章をしていなければ区別がつかないようになったと非難された。（それは連盟によるなれあいの所為も

あると思われる。）またリーダーは台を広く使うようになり，テクは流動的になって，つまり見せる応援になったとOBたちは「応援のショー化」を非難している。そして，「応援に対する情熱のようなものは，もう消え失せてしまったような気がします」という批判さえある[39]。

このように，OBたちが以前の自分達の活動と比較して，応援団の現状や現在活躍している団員を厳しく批判するのは不思議なことではないが，実際に応援・テク実体が時間の流れとともに変化したとも考えられるだろう。状況が変ってきたのは事実である。例えば，1950年ごろから，各校応援団・部の中に吹奏楽部ができてから，リーダーのあり方にも応援の形態にも，変化が起き，あくまでもブラスバンドが主役で，リーダーは脇役になってしまったとも言われる[40]。

応援団に対する世間の評価は1976年頃，大ヒットしたマンガ『嗚呼！！花の応援団』[41]の影響によって変わったと言えよう。そのマンガでは，応援団は酒と女に明け暮れる暴力集団として描かれており，応援団を茶化して笑いものにしている。マンガの第1巻のカバーに印刷された文からもこのことは読み取れる。「きれいな女にめっぽう弱い今世紀最大の怪物，青田赤道が南河内大学，応援団のメンツをかけて大暴れ！その一回生，富山と北口をも巻き込んで，ハチャメチャ痛快なストーリーを展開。全国一斉，大爆笑の渦が巻き起こる。鬼の先輩のシゴキも何のその，一回生の活躍も感動の嵐！果して団のメンツは保たれるのか！？」。

画は醜くストーリーも不快感を与えるところもある。このマンガがヒットしたため，東京六大学ではそのような応援団のイメージとのかかわりを否定し，「応援とは，応援団とは何だ」という応援の原点を改めて問い直し，再確認しようとした[42]。にもかかわらず，皮肉なことに，そのマンガの影響か，六大学応援団の学生服も「ガクラン化」しだして，カラーも高く，裾も長くなってきたが，そのころの団員によると，応援団気質には全然影響がなかったということである[43]。

しかしなぜガクランのファッションが変わったのか。敢えて次のように推論してみよう。応援団はそのマンガによる注目をうまく利用し，応援団の否定的な，暗いイメージがもっと明るく軽い，親しみやすいイメージへ変わることを好ましく思った可能性もある。その新しいイメージも良くないと言っても，暴力集団と言っても，冗談として笑い飛ばせるほどであれば，自分のイメージにはプラスになるので，マンガによって作られたイメージのビジュアルな要素だけでも借りた，という発想もありうるだろう。このように，ガクランをマンガのスタイルに合わせ，注目を引き付けながらも，マンガに登場する応援団のあり方を否定した上，応援・応援団の実態を考え直すきっかけにしたと思われる。

5　応援団の存在意義（レゾンデートル）

同志社の応援団が発行した新入生向けの学内雑誌「栄光」の1954年版では，応援団の活動は次のように紹介されている。

> リーダー部は声とゼスチャーによって応援に来た全学生をリードーし個人的無秩序な応援をなくし智性の充満したる集団的に秩序正しき合唱や拍手のリードにより我が方を勝利にみちびく重大な役割をおわされて居る。（中略）同志社ファンの中には野球と共にこの芸術的大リーダーを見に来る人が数多くある。かくの如くリーダー部は応援の統一と芸術に生きる大芸術家であると云っても過言でない[44]。

このような文を読むと，二つのことが明らかになる。一つは，応援団によると，集団的に秩序正しい合唱や拍手が必要である。それは勝利にみちびくとされる。そして，自分たちは大芸術家であり，試合と共にリーダーを見に来る人がいると意識して，応援団は試合の応援の為だけに動いているのではなく，リーダーも見られたい，注目を浴びたいと思っていることが読み取れる。それは現在でも変わっていないと思われる。1999年夏に行なったアンケートで、団員としてのメリットとして，26人の内の2人が，大学内で有名になることを挙げたこともそれを物語っている。

では，スポーツ競技に応援が本当に必要かどうか，という質問には簡単に答えられないだろう。たしかに応援団がなくてもスポーツは成立するのは事実である。また，ドイツ・ミュンスター大学のスポーツ科学者，シュトラウスらの調査によると，応援はゲームの結果に影響を及ぼさない。それぞれのアメフト・チームのチア・グループが自分のチームを応援したり，相手のチームにプレッシャーを加えたりしても，その効果は互いに帳消しになる，ということが明らかになった[45]。しかし，そうだとすれば，もし一つのチームに応援があって，相手のチームになければ，一方のチームには有利で，勝つチャンスが増えて，ない方のチームには損になる，つまり応援が必要である，という結論も可能になるだろう。そこでもう一つの疑問が生じる。個人的・無秩序な応援と比べて，リーダーに導かれた秩序正しい，集団的応援を行なう方が効果的であるかどうか，そう考えると応援団が必要かどうか，ということもこれから調査されるべきであろう。応援団に聞けば，応援団やその行為は必要であると答えるにちがいない。自分の存在に理由をつけるために，観衆の個人的・無秩序な応援は非力で，リードされた集団応援は効果的であるという幻想（幻想か事実かは別として）を強くもっていると考えられる。

上記のことは直接応援団の存在理由・存在意義にかかわるのである。『スポーツとは何か』という本で述べられている説によると，そこに応援団のジレンマが潜んでいる。応援団の存在理由が弱いので，その発足当初から様々な暴力事件が起るとされる。「それは，スポーツにとっては第二義的な価値でしかない“応援”という行為を，“応援団”という組織では第一義的な価値に置き換えたところから必然的に生じる矛盾（存在理由の希薄さ）が蓄積され，“欲求不満”（表舞台で活躍したい欲求）が爆発したものといえる」，とされている[46]。つまり，あくまでも第二義的な，二次的な存在にすぎない応援団は試合に直接影響を与えず，それほど重要ではないので，不満やフラストレーションが溜まり，それが暴力として発散される，と言うのである。

しかも，存在理由を強めるつもりで，スポーツにおいて「第二義的な存在」から「第一義的価値」を主張するために，応援団は暴力を伴う事件を起こすとされているだけではなく，「応援という行為を組織化し，日常化して（第一義的活動にして）“応援団”を組織するには，その存在理由の希薄さ（応援団など存在しなくてもスポーツは成立するという現実）を隠蔽する必要に迫られる。そのため，日本の（大学の）応援団は，団長以下の強固な上下関係を築き，規則（罰則）を厳しくし，集団行動を徹底し，行動や外見（服装）を儀式化，様式化して，本質的に希薄な存在理由を補強した」，と述べられている[47]。つまり，団内の厳しい上下関係や規則などはその薄い存在理由を隠すために築かれたとされている。たしかに，応援団の上下関係や規則は厳しいが，先輩を尊敬し仰ぎ見てその命令に必ず従うべきというルールは他のスポーツ・クラブ（特に野球部など伝統の長いクラブや空手部など日本の伝統的なスポーツのクラブ）にも見られる。従って，上下関係や厳しい規則は応援団のみの特徴であるとは言えないだろうが，このようなルールに基づいて「行動や外見を儀式化，様式化」すること自体は応援団の独特な，薄い存在理由を強めるために加えられる方法であると考えられる。何故かというと，服装・行動などの儀式化・様式化によって応援団がきちんとした形態をもった組織になるからである。

日本の応援団と違って，アメリカのチア・リーダーやチア・ガールの場合は，「“容姿端麗で成績優秀”といった，“応援”という行為とは本質的に意味のない条件を付与し，その存在理由の希薄さを補った」[48]とされ，それは，アメリカのチア・グループはルックスも成績も良いので，存在理由を疑問にする必要がなくなった，という意味になるだろう。しかし，今日の日本の応援団も，外見を工夫してショー効果や技法を使ってビジュアルな面でアピールしているので，「容姿端麗で成績優秀」とは見られなくても自分の存在理由の希薄さを補おうとしていると思われる。

では，応援団の存在理由が薄いため，暴力が最初から必然的であった，という説を考えてみよう。たしかに，存在理由が薄いという認識からフラストレーションが生まれるだろうが，そもそも存在の必要性のないものは成立しないのではないか。選手や観

衆を盛り上げるために，試合の応援が必要とされたから，応援団のようなものが結成されたと言えるだろう。だとすれば，何故暴力が現れるのか。応援団には，見るだけでは満足できず，選手と同じく何かをする人になりたい，という目立ちたい者，観客という競技に直接参加できない受け身的な役割に満足できない者が集まると考えられる。このような情熱的な者は目立つためには，自分の目標を達成するために，暴力という手段をも辞さないとも思われる。上に述べたように，発足当初から，応援団には熱烈な人が集まって，過熱ぶりが競技中止の原因にもなったのであるから，応援団の歴史を見てもその推測はある程度当たっていると言えよう。

6　おわりに

応援団の歴史をたどると，その活動の本来の目的を大きく3つに分けることができる。それは，1，試合の際に観衆の応援を指導しながら，自分の学校のチームを励まして勝利に導くこと。2，自分の学校の代表者として自分や学生たちの愛校心をたかめること。そして，3，学園の警備やスポーツ試合などの時に自分の大学の学生たちを外からの暴力から守ることである。

しかし，最近は試合などの際，大学間の攻撃的行動や，学園での暴力があまり見られなくなったので，3の保護・警備機能は現在必要でなくなったと言えよう。なお，わざわざ選ばれた応援団の制服などの外観や，激しい畏縮させる軍隊風の行動・振る舞いは，（保護をより効果的に行なうためにあると考えられるので）直接その保護機能に基づくに違いない。つまり，現在の応援団の機能・使命に，その外観や振る舞いが実際に不要になったと言えよう。にもかかわらず，それは応援団の特徴として大切に残されている。それどころかガクランや激しい応援行動（リーダーをふること）は明らかに応援団の自慢にさえもなっている。このように，外観や行動は形としてだけ残り，いやおうなく過去の時代からの奇妙な遺物のように見える。極端に言えば，応援団は形にはまって，マンネリ化して自己のカリカチュアになった。

しかし，キャンパス，イベントなどでの応援団のパーフォーマンスを見ると，この矛盾状態は彼らにとってけっしてジレンマになっていないようである。応援団はむしろ，それをプラス・イメージにしようとする。応援団のショー化を背景に，厳しい演武の傍らにユーモアに富んだ，コミカルな出し物もある。つまり，厳しい表情・演武と対照的に，道化になって，応援団員は暗いイメージと遊んで，自分を笑い者にすることもできる。（これは応援団員がキャンパスの有名人になって人気者になる理由にもなるだろう。）

この応援団の特徴である厳しさとこっけいさという二重性によって，特別な面白さが生まれてくる。この面白さのゆえに，応援団の，時代遅れになった制服や行動が残されていることが緩和される，そして許されるようになると言えよう。

本稿では，応援の歴史や変化，そして存在理由についてしか取り上げられなかった。それだけで，応援団という現象を充分に浮き彫りにしたとは言い兼ねる。今後は（本稿の続きとして）さらに残された質問について取り上げようと思う。それは例えば応援団員の動機や，大学におけるスポーツ，キャンパス・学園全体にとっての応援団の役割などである。

註

1）簡略にするために，これからは「応援団」という言葉で，応援団全体（リーダー部，吹奏楽部，チアリーダー部）ではなく，ここでのテーマ対象になる，ガクラン・袴を着る，男性団体のリーダー部だけを指す。
2）東京六大学応援団連盟OB会編『応援団・六旗の下に』シュバル　1984年。
3）『新教育学大事典』第一法規　1990年（全8巻）第1巻，240頁。
4）『応援団・六旗の下に』，102頁。応援団の歴史について詳しく取り上げた資料はこれ以外には見当らなかった。
5）同上，102頁。
6）同上，103頁。
7）同上，104頁。
8）同上，104－105頁。
9）同上，106頁。
10）同上，107頁。
11）同上，108頁。

12）同上，46頁。
13）同上，55頁。
14）同上，9頁。
15）同上，48頁。
16）同上，56頁。
17）同上，61頁。
18）同上，62-63頁。
19）同上，35頁。
20）同上，36頁。
21）同上，38頁。
22）同上，68頁。
23）同上，35頁。
24）同上，36頁。
25）同上，36頁。
26）同上，38-39頁。
27）同上，80頁。
28）同上，65頁。
29）同上，77頁。
30）『同志社大学応援団創団80周年記念誌』1986年，70頁。
31）『応援団・六旗の下に』，10頁。
32）同上，15頁。
33）同上，83頁。
34）同上，87頁。
35）同上，88－89頁。
36）同上，91頁。
37）日本風俗史学会編『日本風俗史事典』弘文堂　1979年，61頁。
38）『応援団・六旗の下に』，92，97頁。
39）同上，94－96頁。
40）同上，99頁。
41）どおくまん（著者）『嗚呼！！花の応援団』　全12巻，再発行ホーム社　1994年10月－1995年9月。
1976年作，そして1996年作（再映画化）のナンセンス・コメディ映画がある。（野村正昭，北川れい子特集「嗚呼！！花の応援団，あの青田赤道が帰ってきたのねんのねん！」，キネマ旬報社編　『キネマ旬報』1996年11月，82－85頁。）
42）『応援団・六旗の下に』，82頁。
43）同上，222頁。
44）『同志社大学応援団創団80周年記念誌』1986年，20頁。
45）*New Scientist* 9. 1999, p7（Nothing to shout about）.
"Strauss found that crowd support had absolutely no impact on the outcome of an individual down. He says cheers are probably ineffective in other complex team sports as well, such as soccer and ice hockey. He suspects that positive and negative effects of cheering may cancel each other out. On the one hand cheering seems to improve speed, while on the other it seems to hinder coordination. But it makes the spectators feel better, he says, giving Them the illusion of control."
つまり、味方の応援でさえ，選手の集中力を妨げることがある，と指摘されている。
46）玉木正之　『スポーツとは何か』講談社現代新書　1999年，45頁。
47）同上，46頁。
48）同上，46頁。